

令和6年度 “社会を明るくする運動”可児地区作文コンテスト

中学生の部 社会を明るくする運動可児地区推進委員会 会長賞

「心のバリアをなくす」

可児市立中部中学校 2年

大澤 一輝

心のバリアをなくす。これが社会を明るくするために必要なことだと思う。バリアは日本語で障がいという意味の言葉です。スロープを作るなどの環境のバリアをなくすバリアフリーの取り組みはよく見かけます。しかし、いくら環境のバリアをなくしても心のバリアをなくさないと意味がないと思うきっかけとなった体験があります。

ぼくは小学校六年生のころ市民ミュージカルに参加しました。そこには障がいのある人が参加していました。その人は目と右耳に障がいがあり、車いすに乗っていました。初めて会ったときぼくは、その人のことをあまりよく思っていませんでした。それは少し前に見た、店の人に机をどこしてもらっているのに「これじゃ通れないでしょうが。」と怒っていた人を思い出したからです。ぼくは無意識に障がいがある人は面倒だと決めつけて、差別をしていたのです。

ぼくはその人が、みんなと同じように動けないことや、右側から話しかけても聞こえないことで、普通の人と同じように関われなくて面倒くさいと感じていました。また、店で見た出来事のように、気を使わないと自分が悪く思われるを考えてもいました。そんなことから、最初はその人をさけていました。

その人は買い物に来ている主婦の役の一人でした。それをみて僕は、わざわざ車椅子で目も見えない人が買い物に来る設定は変だと感じました。その話を帰ってから母に話しました。すると母は

「それって障がいのある人は買い物にも行っちゃいけないってこと？」
とぼくに言いました。ぼくはハッとしました。ぼくは障がいのある人は、みんなと同じことはできないし、だれかに買い物にいってもらえばいいのだから、わざわざ車椅子を押してもらってまで自分で買い物に行く必要はないじゃないかと思っていたのです。そのとき、「障がいは、その人自身ではなく周りにある。」という言葉を思い出しました。

僕みたいな考えをみんなが持っていたら障がいのある人は何にも挑戦ができなくなってしまうと思いました。そして、自分がその人にとっての障害になってしまっていたことに気が付いたのです。

市民ミュージカルでは、ミュージカルに挑戦したいと考えたその人ができる役を、演出の人が考えました。周りの人は、その人の動きを自然にサポートしたり、その人の左側から話

しかけたりしていました。

その人は耳が聞こえる人と同じようにセリフが言えるわけではありません。おどりも手を動かすことしかできません。それでも、このミュージカルでは、みんなと同じように輝いていました。障がいがある人もない人も同じミュージカルをつくりあげる一人でした。

周りの人の心にバリアがなければ、何にでも挑戦できるのです。

今、ぼくは、バリアをゼロにすることはできていません。障がいがあるからできないと決めつけたり、自分との違いばかりに目を向けたりすることが心のバリアになってしまっています。しかし、障がいのある人とひとくくりに考えるのではなく、一人の人として向き合えば、心のバリアはなくなるのではないでしょうか。

偏見をもたずに一人の人として関わることで、障害のない世の中にいていきたいです。